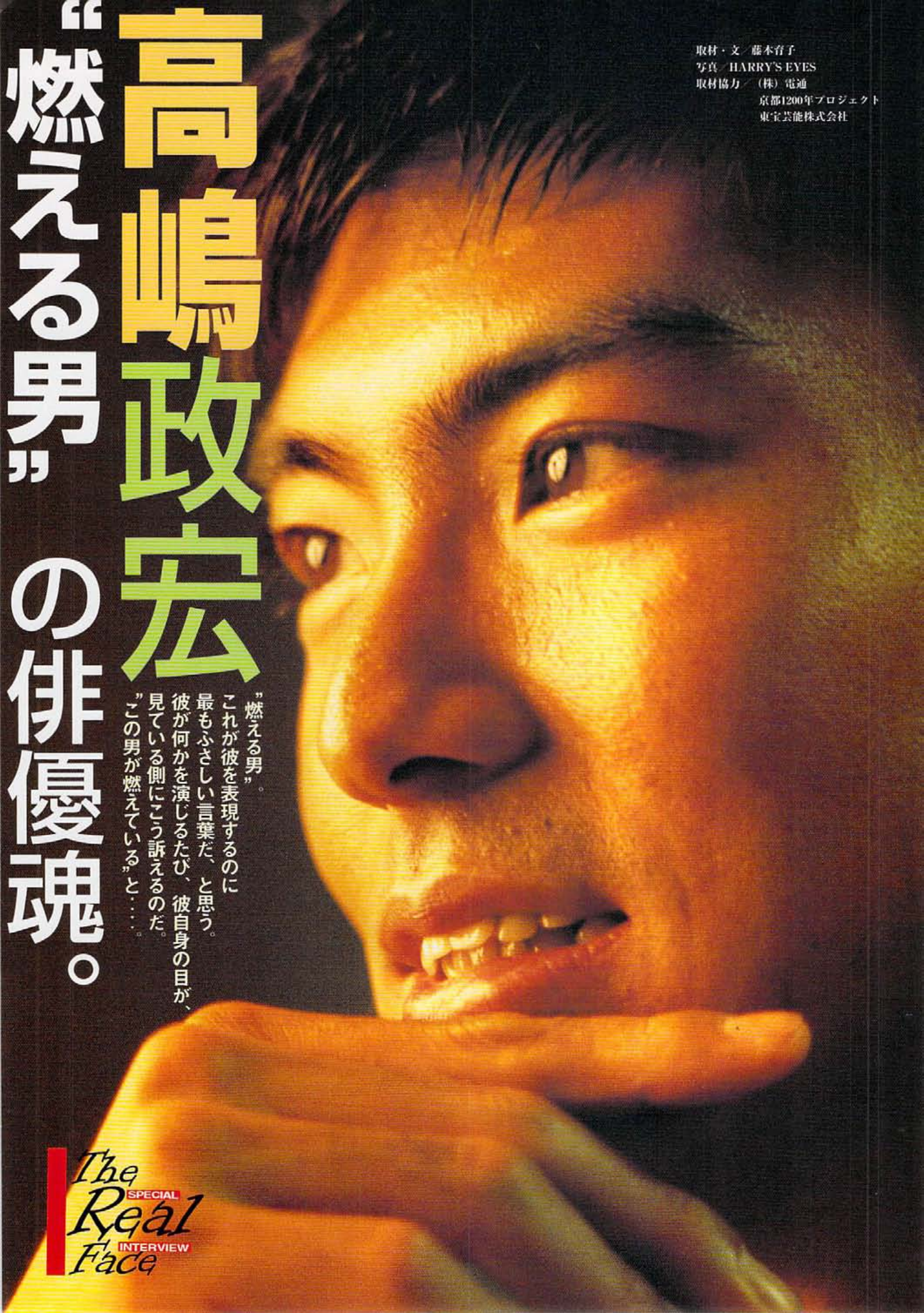


高嶋政宏

"燃える男"の俳優魂。

"燃える男"。
これが彼を表現するのに
最もふさしい言葉だ、と思う。
彼が何かを演じるたび、彼自身の目が、
見ている側にこう訴えるのだ。
"この男が燃えている"と・・・。

取材・文／藤本育子
写真／HARRY'S EYES
取材協力／（株）電通
京都1200年プロジェクト
東宝芸能株式会社

The Real Face SPECIAL INTERVIEW

目指しているのは“これが高嶋だ”というオリジナリティを出すこと。

87年、映画『トットチャンネル』でデビュー。日本アカデミー賞・毎日映画コンクール・ブルーリボン賞と、各新人賞を総ナメにする。以後、時代劇からトレンディ・コメディ・シリアス等、ジャンルを問わず、スクリーンやブラウン管でその才能を発揮してきた。それが俳優・高嶋政宏である。彼は、いわずと知れた芸能一家・高島家の長男。父・忠夫と同じ土俵に上がり、弟・政伸も後を追って同じ道を歩んでいる。彼を取り巻くプレッシャーは、相当強かったのではないだろうか。例えば、相撲界をしょって立つ若乃花関・貴乃花関のように・・・。

「最初の1、2年は、プレッシャーもライバル意識もありました。でも、所詮、自分しかないとわかった時点で自然にその気持ちはなくなりましたね。撮影現場では、たとえスタッフが30人いようと60人いようと、カメラの前に立てば一人。誰も助けてくれない。そんな世界ですから」。

《芸能人の子供＝才能がある》なんて方程式が通用するほど芸能界は甘くない。しかし、人々の心の中には想像の域を脱していない創られた概念が存在しているというのも現実だ。演技力は親譲りだろうとか、人気が出て当たり前だとか・・・。だが、ここ数年の俳優・高嶋政宏は、そんな概念を吹き飛ばす程の実力を発揮してきた。なかでも一昨年前にオン・エアされ、大ヒットしたドラマ『同窓会』や昨年のドラマ『夜に抱かれて』。

自然体の演技にプラスαが加えられた時、素晴らしい俳優になれると信じているんです。

PROFILE

たかしま　まさひろ　**高嶋政宏**

俳優。1965年生まれ。
1987年、成城大学在学中に映画『トットチャンネル』でデビュー。
その存在感が注目され、以後、多数の映画・TV・CMに出演。
歌手としても才能を発揮し、4枚のCDアルバムが発売中。

主な主演作

映画　『悲しい色やねん』『新・極道の妻たち』『ヤマトタケル』等。
TVドラマ　『デパート夏物語・秋物語』
『有森冴子Ⅰ・Ⅱ』『同窓会』『夜に抱かれて』等多数。

この2作で見せた彼の演技は、爽やかさ・かっこよさ・凛々しさという二枚目俳優の形容詞とは異なるものだったといえるだろう。そう、彼は人間の奥に潜む純粋な心模様を熱演し、新たな感動を与えてくれた。それは俗にいう『裏の世界』に生きる人々の真の姿であり、ある意味でスキャンダルなものだったかもしれない。賛否両論の声もあるが、個人的には高嶋の、圧倒的ともいえる演技力に度胆を抜かれたのだ。

「今、俳優として俺自身が目指しているのは"これが高嶋だ"というオリジナリティを出すことです。20代の自分が、いかに自然体で自分以外の誰かを演じることが出来るか。本来の自分の姿が、その役にどう反映されるかを一番に考えてるんです。ほら、生き癖ってあるじゃないですか。自分自身の中で得た癖みたいなものって。どんな役を演じても、その癖はなかなか抜け切れるものじゃない。じゃあ、それをどう活かして、どう反映させていくか、ということになるでしょ。それがオリジナリティにつながるんじゃないかと思うんです。誰かのマネをした演技ではダメ。一度でも誰かをマネてしまうと、一生『○○風』というレッテルがつきまとってしまう。それじゃ俺は納得できないんです。俺はカメラの存在を感じさせない自然体の演技が出来る俳優になりたい。俳優の原点は、自然体の演技にあると思うから。そして、自然体の演技にプラスαが加えられたとき、素晴らしい俳優になれると信じているんです。そのαがオリジナリティだと…。淡々とした魅力を感じさせ、見ている側にカメラをまったく意識させない。なおかつ、頭のてっぺんから足の先まで役になりきり、ストーリーの流れに自然と存在している。俺は、そんな俳優を目指してます」。

身長185センチ、体重78キロ。均整のとれた身体と甘いマスクという彼の容姿は二枚目俳優そのものだ。特に彼の目。強烈なインパクトを与える彼の目は、今、こうして話していても釘付けになってしまう魅力がある。それは、彼の目に"こうなりたい"という強い意志を感じさせるパワーがあるからだと思う。どこで、どんな役を演じても、俳優・高嶋政宏の存在感を築いているのはこの目に現われているエネルギーかもしれない。甘いマスクの下に隠れている熱い男のエネルギーが作品を盛り上げ、共演者を引き立て、見ているものに感動を与える。彼は、そんな"熱い"俳優だ。

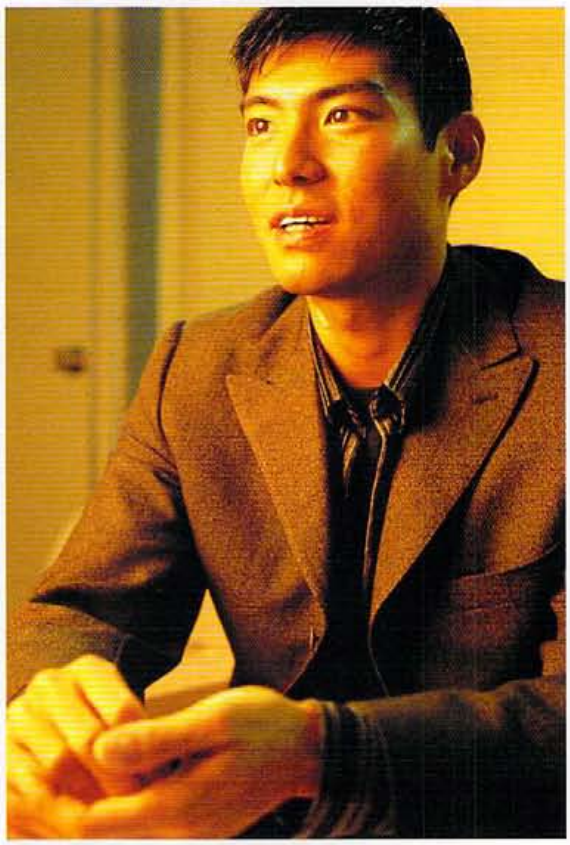
道を踏みはずさなかったのは、"映画"があったからなんです。

そんな彼にも隠された（？）過去がある。その過去が、俳優の道に進んだきっかけになったという。

「俺ね、実は高校の中頃まで105キロもあったんですよ。でも、高校の終わり頃に辛く、苦しいダイエットを決行しまして…もう、女の子にモテたい一心で！（笑）NASAが開発したサウナスーツってのがあって、それを着て真夏の3カ月間、毎日走ったんです。それで85キロまでおとし、あとはジムで鍛え、最終的に75キロまで痩せました。ここから180度、生活が変わったんですよ。遅咲きの狂い咲きってやつですか？ディスコや飲み屋なんかに行きまくりましてね。毎晩渋谷・六本木の朝までコース！（笑）」。

今まで味わうことのなかった夜の世界の魅力にどっぷりつかった彼は、このまま水商売の道に進もうかと考えたこともあるそうだ。

「道を踏みはずさなかったのは"映画"があったからなんです。物心ついた時から、俺のまわりには映画しかなかった。というより、映画にしか興味を持たなかった子供だったんです。だから、夜遊びしてても映画だけは見続けていたんですよね」。



『燃えよ！ドラゴン』や『ジョーズ』に魅せられ、スピルバーグやルーカス、コッポラ等、現代の巨匠の作品を中心に、あらゆる映画を見まくったという少年時代。その記憶が、眠っていた彼の俳優魂を呼び起こした。彼は、身体のどこかにインプットされた映画という世界を切り放すことは出来なかったのだ。

『『用心棒』の三船敏郎さんや『泥棒成金』のケーリー・グラントに憧れていたんです。スクリーンの中の俳優が子供の頃のヒーローだった。ブルース・リーにも憧れたな。ストーリーが理解出来なくても、無意識に主役を張る俳優のかっこよさ、素晴らしさに魅かれていたんでしょうね。

そういって笑った彼の表情は、きっと子供の頃から変わっていない『根っからの映画好き』の顔なんだろう。この笑顔が、俳優への道の道標になったのではな

いだろうか。

「映画がなかったら、俺の人生は変わっていたかもしれない。映画は俺のすべてですから。その中に音楽をはじめとするいろいろなものが含まれているんです」。

俳優と歌手という二足のわらじが当たり前となりつつある今、彼も数枚のCDをリリースしている。デビュー前のバンド活動から得たというその歌唱力は、『本業は歌手』といってもいいぐらい、レベルが高い。バラード調の曲なんかは絶品だ。

「映画と音楽の関係を切り放して考えがちだけど、俺の中での音楽は、映画のパーツという感覚なんです。映画に関わるすべてに興味があるから、当然、音楽も好きというか…歌には何も決まりがない。誰かにどうしろと指示されることもなく、ノリや勢い、その場の雰囲気を素直に感じ、表現できるのがいい。勉強になりますね。コンサート等でお客様の目線に立ち、さらしものになるのも快感なんですよ」。

最終的には、俺の実力が認められるか、られないかで勝負が決まる。

数少ない休日は、映画や音楽鑑賞、ジムでのトレーニング等、一見、ありふれた休日をエンジョイしている彼。だが、ここでも俳優・高嶋政宏は燃えている。

「釣り好きの人が休日に釣り竿の手入れをしたり、ゴルフ好きの人がクラブを磨いたりするでしょ。それと同じ感覚なんです。ただ、俺が一番楽しめるのが演じることだというだけ。だから、自然と休日が本番のために準備をする日になってしまう。俺は仕事を楽しくしたい人間だから、そのための努力は惜しみたくないんです。今までの俳優人生で学んだことなんですが、楽しく仕事をするためには、自分がやるべきことを完璧に準備しなければならない。もうこれでもかっ！てぐらいに準備をする。準備…準備しかないんですよ、役者には。台詞を覚えるとか、役どころをつかむとか、基礎的なことだけではダメなんです。キャスティングされた時点で選ばれた人間なんですから、『どうしよう』とうろたえるわけにはいかない。あとは、自分が今、持っているすべてを出し、全力で演じるしかないんです。最終的には、俺の実力が認められるか、られないかで勝負が決まるんだし、それが役者のやらなければならないことだから。まぁ、最近はちょっとバクチ的な考え方になってきて、思いっきり演じてダメなら『しかたないか』なんて、あっさり思っちゃうこともあるんですけど（笑）」。

いい映画を見る・いい音楽を聴く・身体を鍛える・ライブ感を味わう等、彼の生活のすべてが俳優としての自分の準備期間につながっているという。

「充分に準備が出来た時は、現場でも余裕が生まれるんです。その余裕がパワーにつながり、撮影を終えた後、なんともいえない充実感が味わえるんです。あの『燃えつきたーっ』という感覚は、やみつきになりますね」。

演じている役柄が日常に出てきちゃうタイプなんですよ。

このインタビューの前に、彼があるトーク番組に出演しているのを偶然、目にしたことがある。ブラウン管の中の彼は寡黙な好青年、といった感じだった。だが、今、目の前にいる彼は、まるで別人のよう。自分のペースで話す、話す、話す…あの時の高嶋政宏は一体何処へ？

状態である。

「その時演じている役柄が日常に出てしまうタイプなんです。今はホスト役ですから（インタビュー時は『夜に抱かれて』収録中）、どこに行ってもサービス精神旺盛！いたれり、つくせりですよ（笑）。飲みに出て全員の水割りを作ってまわる俳優は、俺ぐらいでしょうね」。

それ程役に没頭してしまうのなら、今が女性を口説くのに一番いい時期なんじゃないですか？と、意地悪な質問をぶつけてみた。すると、彼はさっきまでの態度から急変し、うつむきながら首を横に振るではないか！

「それがね…女性だけはダメなんですよ。地味な学生生活を送ってたせいか、接し方がわからない。たとえ今、恋人がいたとしても、休日は映画や音楽に走ってしまうし、クリスマスや誕生日も『俺

LADIES ONLY
LADIES ONLY
ごっこんメンバー
0120-194-198
イクヨイクワ
TELEPHONE-CLUB
1年1組
でんわ組
SubCall o75-822-1231

The Real Face
SPECIAL INTERVIEW

には関係ない」という感覚になってしまってて…。何はともあれ"自分"という性格ですからね。そのわりには「俺についてこい！」なんて自己中心的なワガママ発言が出来ないんですよ。女の子に一言「ヤダ！」といわれたら、あやまりもせずにパッと消えちゃうような、ずるいヤツなもんで」。

恋のウワサが流れても、本当のところは俳優業が先行しているようだ。

「今は撮影の瞬間が一番楽しいんです。撮影が仕事という気がしないしね。昔は作品によって辛いと感じる事もあったけど、今はとにかく楽しくてしょうがない。それが変わるまで恋愛は二の次ですね」。

それでも自分宛に来たファンレターには、どんなに忙しくても自分で返事を書くという。本当は、根っからやさしい人なのだ。

「女の子からのファンレターは嬉しいですね。ラブレターもバレンタインデーも関係のない、わびしい時代が長かったから（笑）」。

自分が一番活かせる役が巡ってきた時が、本当のチャンスだと思う。

これだけ俳優業にドップリつかっている彼は、四角四面の男なのか？いや、実はそうでもないらしい。

「酒がはいると、けっこうアブナイヤツらしいんです。いつも皆様に多大な迷惑をかけているそうで…自分じゃ覚えてないんですがね（笑）。馴染みの店に行くと、まず、店のスタッフが俺の顔色を見て、今日は大丈夫かどうか確認するぐらい、ひどいみたいです。暴れまわって、物を壊したりもしたことがあるらしくって…」。

彼の豪快話は酒の席だけじゃなく、撮影中の失敗談もなかなか豪快だ。

「初めてのベッド・シーンの時なんですけどね、撮影のことを忘れて、前の日に巨大ギョウザを食べちゃったんですよ。そしたら当日のリハの後、相手役の付き人さんがいきなりガム持ってこっちに来るんです。『何ですか、これ？』って聞いたら『ガム食わせてこい！って…』だって（笑）」。

生き癖が俳優としての道に反映されるのなら、彼自身がこんな愛敬も兼ね備えているからこそ、着実に、俳優としてステップ・アップが出来るのだろう。人間的に魅力のない役者が人々に感動を与えることなんてできやしない。ましてスーパースターには…。その意味でも、彼には充分その資格があるといえる。

「やっぱり、いつかはスーパースターになりたいと思います。世界的なね。でも、例えばハリウッドに進出できるという話がきたとしても、どんな役で進出するのかをきちんと打ち出せる役者でいたい。自分が一番活かせる役が巡ってきた時が本当のチャンスだと思うし、その時に"これが俺のオリジナリティだ"と、堂々といえる俳優になりたいですね」

星の数ほどいる俳優の中で、人々の記憶に残るスーパースターと成り得るのは、ほんのひと握りだけ。彼は今、そのスタートラインに立っている。

今後、どんな形でその階段を登っていくのか。また、その時の彼のオリジナリティとは、一体どんなものなのか。世界の舞台で活躍する彼の姿を今から楽しみにしておこう。